


今年最後の聖日、そして最後の日を迎えました。皆さんそれぞれに、さまざまな思いで今日の日を迎えられたと思いますが、私がお一人びとりに尋ねたいこと、それは主イエスとの関係についてです。いかがでしょうか？あなたと主イエスとの関係は、以前と比べて、より近いもの、より深いものとされていますか？「はい」と答えられる方は、何をもってそう言われますか？また「いいえ」と答えられる方は、なぜそうなのでしょう？主イエスとの関係がより近いものとならなかった理由は何だと思いませんか？

私がこのように問うのは、主イエスを信じる者の歩みが、すべてこの方との関係にかかっているからです。もしそこに愛と信頼による、いのちの通った交わりがあるならば、私たちは豊かにされ、もしそこにいのちの通った交わりがなければ、私たちは貧しくなります。主イエスご自身が、永遠のいのちであり、恵みと平安とで私たちを満たして下さるお方だからです。ですから、いつでも、この主を慕い求め、主に導かれて歩むことを求める人には、主は聖霊とみことばを通して御心を示し、それを行わせて下さいます。そのようにして、ご自分を信じる者に、またその信じる者を通して、ご自身の栄光を現わされるのです。そのことを覚えつつ、この朝もみことばに聴かせていただいましょう。

前回この使徒の働きを見たのは、三週前でした。ですから、簡単に復習しておきます。15章の最後では、パウロとバルナバが、マルコに対する評価の違いから激しい反目となり、それぞれ別行動を取るようになったことを見ました。そして、16章の初めでは、シラスを連れて出かけたパウロが、ルステラにいた弟子のテモテに割礼を受けさせるのを見たのです。それは、テモテを旅に同行させるためでしたが、もっと言うと、ギリシヤ人を父にもつテモテをして、彼が何の妨げもなく、ユダヤ人に福音を語れるためでありました。つまり、テモテの救いのためではなく、福音宣教のために、パウロはテモテに割礼を受けさせたのです。

さて、そのルステラを出た後、パウロたちは、イコニオムやアンテオケに行ったと思われませんが、その後のことが今日のところです。6-8節「それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。8 それでムシヤを通過して、トロアスに下った」。

地図を見て下さい。アンテオケの後、パウロたちは、その西に位置するアジアと呼ばれている地域に行こうとします。ところが、聖霊がそれを禁じたので、彼らは北西に進み、ムシヤへと向かいます。彼らがムシヤに面した所に来たとき、今度は、北側のビテニヤ地方に行こうとするのですが、またしても、主の御霊がそれを許しませんでした。彼らに残されたのは、さらに西へ向かうこと、つまり、港町のトロアスに行くことでした。そこからエーゲ海を挟み、北西に位置するのが、この後、出て来るマケドニヤ地方のピリピの町です。

ここでは、パウロたちの計画が、二度も、主によって妨げられていることが記されていますが、「聖霊」そして、「イエスの御霊」がそれをしたということですから、言うまでもなく、それをされたのは主ご自身です。主はなぜそうされたのでしょうか？その地域に向かう彼らの動機に何か問題があったからですか？「アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた」ですから、彼らの動機は、みことばを語ることでした。そして、それはビテニヤに行こうとした時も同じであったはずです。では、なぜ主はそれを禁じられたのか？

パウロたちが、そこに行こうとしたのを、どのようにして聖霊が禁じたのか、また主の御霊が許さなかったのかはわかりません。彼らが、聖霊の声を聞いたのか、それとも、心に平安がなかったことをそのように表現したのかはわかりません。でも、彼らは確かに聖霊がそこに行くのを禁じておられることがわかった。おそらく、彼らのうちに、主からの平安と確信が与えられなかったのでしょう。

西のアジア、また北のビテニヤに行くことを禁じられた彼らは、ムシヤからさらに西に進むことで港町のトロアスに着きます。すると、そこで主は、幻を通してパウロに語られたのです。9-10節「ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください』と懇願するのであった。10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである」。

以前も少し触れましたが、この10節から、この手紙の著者ルカが、パウロたちの一行に加わったと考えられます。それは、主語が「パウロ」や「パウロたち」から「私たち」へと変わるからです。もしかしたら、このルカが、パウロの幻に現れた人物であったのかもしれませんが、でも、もしそうであったら、目の前にいる人を幻と表現するのはおかしいので、やはりパウロは幻を見たのでしょう。ペテロがヨッパで空腹を覚え、食事の支度を待っている間に、天からの幻を見た時のようであったのかも知れません。

いずれにしろ、この時のパウロは、間違いなく、主の御心と導きを求めて祈っていたはずです。なぜなら、すでに見たように、これまで自分たちが行おうとしたことが、二度も聖霊によってストップされたからです。ですから、エーゲ海を前に、この港町のトロアスで、パウロもその一行も主からの導きを求めていたはずです。そういう状況のもとで、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください」という幻を見たというのですから、それを主からの導きと捉えるのも自然のように思えます。

ただここで覚えないのは、この招きを神様からのものだと確信したのが、幻を見たパウロ自身ではなかったという点です。パウロ同様、主の導きを求めていた預言者のシラスや福音宣教のために割礼を受けたテモテ、そして、ここから一行に加わったルカも、皆がこの幻を通して「神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ」と確信したというのです。そのことからして、彼らの確信が、単なる思い込みではなく、主からのものであったということができるとはいいのでしょうか。

ちなみに、この「確信」とは、もともとの意味は「ともに結び合わせる」という言葉ですから、彼らがこれまでの主の導きとこの幻をともに結び合わせることで、このような結論に至ったということができます。そして、いよいよここから福音が、アジアを超えて、ヨーロッパへと伝えられていくのです。そして、それこそが、神様をして、教会の大迫害者であったパウロを選び、彼にこの上ない寛容を示すことで、彼を異邦人たちに福音を届ける使徒へと造り変えられた理由です。

11-15節「そこで、私たちはトロアスから船に乗り、サモトラケに直航して、翌日ネアポリスに着いた。12 それからピリピに行ったが、ここはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。私たちはこの町に幾日か滞在した。13 安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。14 テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。15 そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、『私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください』と言って頼み、強いてそうさせた」。

トロアスを出たパウロたちは、マケドニヤ地方第一の町で、ローマの植民都市であったピリピに行きます。そして、安息日に、町の外に出て、川岸にある「祈り場」へと向かうのです。ここで彼らが「会堂」ではなく、「祈り場」へと向かった理由について見ておきたいと思います。それは、ピリピには会堂がなかったから、つまり、会堂を建てるために必要な10人のユダヤ人男性がそこにはいなかったからと考えられています。ですから、彼らは「きよめの儀式」などに都合のよい川岸でもたれている「祈り場」に行き、そこに集まった女性たちに話しかけたのです。

その女性たちの中に、ピリピで最初に救われる、ルデヤがいました。彼女は、テアテラ市（アジア）から来ている紫布の商人で、おそらく、未亡人であったと思われます。紫布とは、王家や貴族などの間で使われていた高級品ですので、ルデヤは、相当の資本を持って商売をしていたと考えられています。その彼女が、パウロたちの福音宣教を通して救われ、彼女の家族もともに洗礼を受けるのです。そして、彼女の家が、パウロたちの滞在先となり、また、ピリピ教会の集まる場所ともなったようです。

このルデヤの救いについて考えてみたいと思います。この時、彼女はすでに「神を敬う」者でした。ですから、旧約聖書には通じていたと思います。そういう意味で、彼女はみことばを初めて聞く、異邦人たちのようではなかったわけですが、でも、ここで注目したいのは、ルデヤがパウロの語る事に心を留めたのは、彼女自身ではなく、主が彼女の心を開いたからだと言われているところです。

つまり、彼女の救いは、パウロの語る事にルデヤが心を留めるために、神様が彼女の心を開かれたので起こったというのです。このことを私たちはしっかりと覚えたいと思います。というのは、私たちは、ただ主のあわれみと恵みによって、このすばらしい救いにあずかっていますが、主が私たちに命じておられること、それはすべての造られた者に福音を宣べ伝えることです。そして、信じる者には、洗礼を授け、主が守るように命じられたことを教えることです。

ですから、私たちには福音を語ることに使命として与えられています。でも、それを聞く人の心を開き、福音に心を留めるようにすることは、私たちにはできないことです。それをされるのは主であって、主は、御心のままに、ご自分のあわれむ人の心に働きかけて、それを開くことで、福音に心を留めるようにされるのです。ですから、そのことは私たちの目には見えないことですが、今日、私たちが主イエスを救い主と告白し、その信仰をもって歩めること自体、それは主のあわれみ、恵みによります。そして、それがただ主の恵みであるゆえに、私たちは、主とその救いを喜び、この良い知らせを伝えずにはおられないのです。

ルデヤは救われた後、自分にできる限りをもって主に仕えようとし、それが15節の「『私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください』と言って頼み、強いてそうさせた」というところからわかります。パウロたちはここを拠点とし、宣教することで、救われる人々が起こされます。そして、この後、ピリピ教会は、パウロの宣教を霊的にも、物質的にも支える大切な存在として、主に用いられるのです。ただそれは人間的に考えて、すべてが上手く行くようなものではありませんでした。むしろ逆境と思えるような中で、主は、パウロたちやピリピの人々を通して、ご自身の救いのご計画を進められるのです。

一年を終えるにあたり、皆さんの中にも自分の行こうとしている道が、閉ざされているかのように思っている方がおられるかも知れません。これまでに経験したことのない状況の中で、どうして良いかわからず、困っている人もおられることでしょう。どれだけ努力しても、愛する人が福音に対して心を開かず、あきらめかかっている人、もしかしたら、すでにあきらめている人もおられるかも知れません。でも、どうか主を求めて下さい。自分の悟りに頼るのではなく、主が聖霊をもってあなたを導いて下さるよう、主に求め続けて下さい。

「天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありますか」と主イエスが言われたように、求める人に、主はご自身の霊を与えて下さいます。そして、それによって私たちには救いの確信が、この上ない喜びと平安が与えられるのです。今日という日、今の時、聖霊を通して、このすばらしい主との愛とのちの関係の中に生かされるなら、この世のいかなる状況の中でも、私たちはいつも主に期待し、主の導きを求め続け、また信仰をもってそれに応答していくことができます。私たちの救いをご自分の喜びとし、十字架の苦しみをも耐え忍んで下さった主は、ご自分を求める者には、聖霊とみことばをもって、行くべき道を示し、導いて下さいます。この主に尋ね求め、いつでもこの福音に生かされようではありませんか。